筑後洋画の系譜　補遺

植野健造

石橋美術館では，2002(平成14)年11月16日から翌2003年3月16日にかけて，「筑後洋画の系譜」展を開催した。この展覧会はサブタイトルを「青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念」としたように，福岡県久留米市に生まれ日本近代美術史に大きな足跡を残した二人の洋画家，青木繁と坂本繁二郎の生誕120年を記念した展覧会であり，かれら二人を中心としてその前後に連なる，久留米を中心としてその周辺地域を含めた筑後地方の洋画の系譜を眺望しようとするものであった。内容としては，石橋美術館のコレクションを中心として，一部の作品を他の美術館や個人所蔵家の協力をえて19人の作家の作品と関連資料で構成した。とりあげた作家は以下のとおりである。

森三美(1872-1913)，吉田博(1876-1950)，
青木繁(1882-1911)，坂本繁二郎(1882-1969)，
松田諦晶(1886-1961)，高島野十郎(1890-1975)，
小松清次(1892-1998)，古賀春江(1895-1933)，
山村秀一(1896-1989)，豊田勝秋(1897-1972)，
田崎廣助(1898-1984)，井上三綱(1899-1981)，
高田力蔵(1900-1992)，伊東静尾(1902-1971)，
坂宗一(1902-1990)，鷹尾和敏(1911-1997)，
内野秀美(1911-1998)，古沢岩美(1912-2000)，
藤田吉香(1929-1999)

この展覧会は地域の美術館としての役割をも担ってきた石橋美術館の，開館以来の美術に関する収集，展示，保存，研究活動の一つの成果として，来館者にもおおむね好評を博し反響も大きかった展覧会であった。展覧会の会期中あるいはそれ以後に，出品作家，あるいはさまざまな事情により本展でとりあげることのできなかった作家やその作品に関する情報がよせられ，作品や資料の寄贈を受けた場合もあった。そのこともまた展覧会の成果であったと考えている。本稿では，この展覧会を補足する意味から，「筑後洋画の系譜」に位置づけることのできる作家に関する情報を報告したい。なお，以下にとりあげる作家は，坂宗一のみこの展覧会に出品された作家であるが，それ以外は展覧会でとりあげることのできなかった作家である。情報をいただいた多くの方々にお礼申しあげるとともに，今後も継続的に情報の蓄積と報告につとめてゆきたいと考えている。

(参考)
・『青木繁・坂本繁二郎生誕120年記念　筑後洋画の系譜』展図録，石橋財団石橋美術館，2002年11月

□坂　宗一(さか　そういち　1902-1990)

1902年5月23日，福岡県犬塚村福光(現・久留米市三潴町福光)に父坂富太郎，母マサの子として生まれる。1919年同郷の先輩画家坂本繁二郎を頼って上京し師事する。一時期川端画学校で素描を学んだ他は油彩画はほとんど独学といってよく，坂本や同じく同郷の古賀春江に制作を見てもらう。1922年実家の破産によって送金が途絶えたため，やむなく帰郷する。同年10月久留米の第7回来目会展に初出品し，来目会関係の知人ができる。1923年頃，久留米の松田諦晶宅で古賀春江に初めて会う。1927年知人を頼って朝鮮に渡り，半年を費やし釜山から京城へ向かう。1929年夏筑後に帰り，二科展出品作を携えて上京，同年9月の第16回二科展に初入選する。1930年再び京城に行き，さらにハルピン(満州)に滞在の後，東京にもどる。1933年9月，古賀春江の葬儀の後，再び筑後に帰る。以後戦後まで上京せず。1934年福岡日日新聞に連載小説「大友宗麟」(田中純作)の挿絵を描く。1937年の第24回二科展では《農具》で二科特待賞を受賞した。1940年福岡県美術協会の創立に参加。1941年二科会会友となる。1942年，福岡日日新聞社特派記者並びに陸軍省従軍画家として上海，武漢，湖南省，北京などを廻る。1944年1月7日，植田久子と結婚，戦後は郷里に近い筑後市西牟田に居を構える。1947年1月16日長男の翁介誕生。前後に一女一男をもうけたがともに幼くして亡くなった。1947年創立の第二紀会(のちの二紀会)に参加，1954年の第8回展と1958年の第12回展で二紀同人賞を受賞し，1960年の二紀展の九州進出(大牟田・松屋デパート)に尽力する。1961年二紀会委員となる。同年，フォルム画廊(大阪，福岡)，フジカワ画廊(東京，大阪，福岡)で個展を開催する。その後はおもに二紀会展に制作発表を続けた。1970年にインド，ネパールを，1972年にネパール，ヒマラヤを旅行する。1979年福岡県文化会館において「坂宗一　墨絵の世界」展を開催。1982年カナダ・ロッキー山脈へ旅行。1984年筑後市勤労婦人センターで「坂宗一回顧展」開催。1990年4月9

日，福岡県三輪町の朝倉記念病院で死去する。1996年「坂宗一展」がサザンクス筑後で開催される。少年時の心象風景を思わせるようなユーモアとポエジーの漂う作風に特色があり，晩年手がけた水墨画も高い評価をえた。

(註)

・石橋美術館ではご遺族の坂翁介氏より，2003年に坂宗一《脱穀》(油彩・カンヴァス)，《久住(晩秋)》(油彩・カンヴァス)の2点の作品を，2007年に坂宗一旧蔵資料一式の寄贈を受けた。さらに本稿執筆に際して坂翁介氏より多くのご教示いただいた。

・また他に，中村一氏より，2003年に《船三艘》(墨，水彩・紙)，《赤絵皿》(墨，水彩・紙)の2点の作品の寄贈を受けた。

・坂宗一が1937年の第24回二科展で二科特待賞を受賞した《農具》は，現在，神奈川県立近代美術館に所蔵される。同作品については，2008年6月25日，神奈川県立近代美術館の伊藤由美氏にご配慮をたまわり作品を実見する機会をえた。この作品は，坂宗一自身によって1975年に同館に寄贈されたとのことである。また本作品は修復されて2008年3月29日から5月18日まで神奈川県立近代美術館で開催された「コレクション全館展示—10,000点からの精華400点　百花繚乱の絵画」展に展示されたとのことである。

fig. 1　坂宗一の旧アトリエ
福岡県筑後市西牟田
2007年4月11日撮影

fig. 2　坂宗一《農具》
1937年，油彩・カンヴァス
112.5×145.5㎝，神奈川県立近代美術館

(参考)

・『坂宗一　水墨画展』展図録，福岡県文化会館，1979年6月

・『日本美術年鑑』(平成3年版)，東京国立文化財研究所，1992年3月

・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第52号(2003年度)，2004年12月

・「坂宗一 WEB 美術館」http://www.saka-sou-ichi.com

□早川銈太郎(はやかわ　けいたろう　1871-1905)

1871年，久留米市日吉町に生まれる。1875年一家で東京に転住する。初め芝，後に四谷に住む。四谷小学校より独逸協会(現在の独協大学)に進む。同協会在学中，体操の授業中に鉄棒より落ち胸部を強打する。これが原因となって肺を病み同協会を中退し，数年の療養生活を送る。1888年中丸精十郎の画塾に入門する。1889年東京美術学校に入学か。1892年3月父親とともに帰郷し，福岡県大川市若津に住む。同年5月再上京し，長姉ムラのもとに寄寓する。1894年福岡県豊津の豊津中学校の図画教員となる。1897年福岡市の中学修猷館の教員となり，図画，書道を担当する。1901年，肺病の再発により修猷館を退職，久留米市荘島町の実家に帰り療養生活にはいる。1905年4月28日，久留米市荘島町にて死去する。久留米市京町の法泉寺に葬られる。早川は，森三美とならび久留米生まれで洋画を学んだ最初期の人物である。ちなみに早川の妹である糸世(イトヨ)は青木繁が1908年に制作した《秋声》(福岡市美術館蔵)のモデルである。

(註)

石橋美術館ではご遺族の安元昭子氏より，2003年，早川銈太郎《風景》(水彩・紙)，《戦場の図》(油彩・カンヴァス)の2点の作品の寄贈を受けた。

(参考文献)

・篠原正一「早川銈太郎のこと」『久留米郷土研究会誌』第1号，1972年11月

・「筑後と九州の画家たち—新収蔵品紹介をかねて—」(展覧会リーフレット)，石橋美術館，2005年1月

・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第52号(2003年度)，2004年12月

・坂井史恵「修復記録」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第53号(2004年度)，2005年11月

□松本豊太(松濤)
(まつもと　とよた(しょうとう)　1874-1924)

1874年9月25日，福岡県久留米市津福本町に生ま

れる。1886年久留米中学明善校入学。その後同校を退学。この間，久留米在住の森三美に洋画を学ぶ。上京して，1896年から1898年まで松岡寿に師事したという。1898年3月久留米に帰る。1899年から長崎県五島中学校，広島市明道中学校，久留米市南筑中学校，久留米市明善中学校において美術教員をつとめる。1910年頃には久留米市立男子高等小学校の図画の教員も兼務していたようである。1906年，久留米の洋画研究団体である審美会の結成に名誉会員として名を連ねる。同会は，鹿毛屋蔵，武田弥一郎，松本豊太(松濤)，丸野豊，青木繁，坂本繁二郎，森三美を名誉会員とし，岡徳四郎，大野米次郎，太田勤，加藤勝，鹿児島彦次郎，垂見豊三郎ら久留米，浮羽，田主丸の洋画同好者の会員によって結成され，写生会，作品の互評会および機関誌『審美』を発行するなどしたが，その活動は1年ほどで終わったようである。1924年2月12日，久留米市において死去。松濤と号した。

(註)

石橋美術館ではご遺族の松本成一氏より，2007年に松本豊太《二人の少女》(1902年，油彩・カンヴァス)を，さらに資料として布地に油彩で描いた絵画5点の寄贈を受けた。ご遺族のもとには，他に《アトリエの二少女》(油彩)，《菊》(油彩)や二曲一隻屏風装の油彩画《棕櫚図》，《向日葵図》などが残されている。なお多くのご教示をいただいた松本成一氏は2007年12月12日にご逝去された。ご冥福をお祈りいたします。

(参考)

・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第55号(2006年度)，2007年12月
・「新収蔵作品」『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第56号(2007年度)(本号)
・『筑後洋画の先覚　森三美』展図録，石橋美術館，1997年9月
・松本一郎『松本一成遺稿集』私家版，1971年12月
・金子一夫『近代日本美術教育の研究』，中央公論美術出版，1992年2月

□大野米次郎(おおの　よねじろう　1884-1920)

1884年1月6日，久留米市苧扱川町2丁目(現在の久留米市本町)に生まれる。荘島尋常小学校を卒業し，久留米高等小学校に進む。同校在学中から久留米在住の森三美に洋画の手ほどきを受ける。森三美塾の同門には，青木繁，坂本繁二郎らがいた。1906年，久留米の洋画仲間である東原経治らと審美会を結成する。同会の活動は翌年頃までで休止状態になったとみられる。1913年，松田実(諦晶)，東原経治らと来目会洋画会（後に来目会）を新たに結成。同会の展覧会に第1回から第5回まで出品した。一方で，1914年に創立された二科会の展覧会にも第1回から第3回まで連続して入選をはたした。1920年12月3日，36歳の若さで死去。1922年3月5日～7日，久留米商工会議所階上において，「大野米次郎氏遺作品　洋画展覧会」(出品点数約100点）が来目会の佐野敏一らによって開催された。

(註)

ご遺族の大野泰雄氏より，大野米次郎のこととその遺作に関する多くのご教示をいただいた。《山村風景》(1913年，油彩・カンヴァス)は大正初期の印象派風の好ましい作品である。

(参考)

・『近代洋画と福岡県』展図録，福岡県文化会館，1980年3月

fig. 3　松本豊太《アトリエの二少女》
1898年，油彩・カンヴァス
115.1×90.0cm，個人蔵

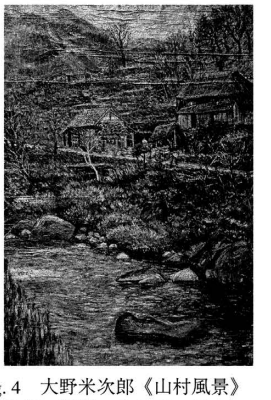

fig. 4　大野米次郎《山村風景》
1913年，油彩・カンヴァス
117.0×80.7cm，個人蔵

・篠原正一『久留米人物誌』菊竹金文堂，1981年10月
・『近代洋画と久留米』展図録，石橋美術館，1982年2月
・大野泰雄『なまずのたわごと』悠思考舎，2005年7月

□石原寿市(いしはら じゅいち　1914-1945)
1914年7月27日，福岡県久留米市に父石原百助，母イサコの子として生まれる。1932年3月福岡県立明善中学校を卒業，同校の同級生に美術評論家の河北倫明(1914-1995)がいた。1933年4月東京美術学校油画科予科入学，翌1934年4月同校油画科本科に入学，同校では南薫造教室に学ぶ。1934年同校の同級生であった萩原英雄，杉原正巳(石川正巳)と3人で版画研究会をつくる。1936年には南薫造教室の同級生たちと唖地社を結成，2回の展覧会を開催した。同年頃から同校の臨時版画教室で平塚運一に木版画を学ぶ。1937年国画会展と日本版画協会展で木版画が入選，後者では日本版画協会賞を受賞し，木版画家として将来を期待された。1938年3月同校卒業。同年の国画会展での入選が公募展での作品発表の最後となる。1938年12月10日出征，龍6739部隊野砲兵第56連隊(久留米)に所属する。1941年8月12日，豊国ミツエと結婚，同年長男修が生まれる。1945年3月22日，ビルマ，シャン州シボウで死去。1968年6月29日勲七等青色桐葉章を授与される。
(註)
石原寿市については，郡山市立美術館の管野洋人氏のご教示をえた。
(参考)
・石原修氏による「石原寿市略歴」(戦没画学生慰霊美術館・無言館提出資料)
・『グループ〈貌〉とその時代』展図録，郡山市立美術館，2000年11月

□藤森静雄(ふじもり しずお　1891-1943)
1891年8月1日，福岡県久留米市に生まれる。同郷の青木繁に憧れ，1910年福岡県立中学明善校を卒業し上京，白馬会原町洋画研究所に通い，ここで田中恭吉を知る。1911年東京美術学校西洋画科予備科へ入学し，恩地孝四郎を知る。以後三人は友情を深め，1912年には三人でしばしば竹久夢二を訪ねる。1913年，恩地，田中と詩と版画による同人誌刊行を計画，1年後の刊行を期して木版画を習い始めた。1914年恩地を助け詩と版画誌『月映(つくばえ)』の編集に携わり，同年刊行する。1915年田中の訃報を受け恩地らと遺作展を計画，同年日比谷美術館で開催した。1916年東京美術学校を卒業，一時，台湾の中学校で教えたが，1922年まで福岡県立嘉穂中学校の教員をつとめる。1918年日本創作版画協会の創立に参加，以後同展に毎回出品する。1921年恩地らと総合芸術誌『内在』を創刊。1922年再上京し，1925年から春陽会展へも出品する。1929年から1932年まで恩地，平塚運一らと「新東京百景」を制作。1931年日本版画協会創立会員。1934年「大東京十二景」を完成。1935年には『福岡日日新聞』連載の近松秋江『紅雀荘』の挿絵を担当する。1940年福岡県飯塚市に転居し，1943年5月28日同地で死去。
(参考)
『近代日本美術事典』講談社，1989年9月
『刻まれた青春譜　藤森静雄版画展』図録，福岡市美術館，1982年1月

□石橋美三郎(いしばし びさぶろう　1893-1968)
1893年3月15日，福岡県山門郡瀬高町下庄(現・みやま市瀬高町下庄)に生まれる。福岡県立中学伝習館を中途退学し，1908年2月上京，太平洋美術研究所に学ぶ。大正後期から太平洋画会展を本拠とし，一方で並行して二科会展をも発表の場とした。太平洋画会では1931年に会友，1932年に同会

fig. 5　石橋美三郎《子供(石橋雪雄像)》
1929年，油彩・カンヴァス
73.3×61.0cm，福岡県立美術館

fig. 6　石橋美三郎《静物(花)》
油彩・カンヴァス
61.0×73.3cm，福岡県立美術館

無鑑査出品，1933年に会員に推挙され同会の幹部となっている。その後も同展を発表の場としたが，1937年からは石井柏亭，有島生馬，安井曾太郎らの発起になる一水会展にも参加した。1940年の二千六百年奉祝展覧会では指定出品者として《樺太の蟹》を出品。一方，1931年には福岡，1932年には柳河，1933年には福岡，久留米，大牟田，柳河，熊本，瀬高で，1934年には瀬高，1935年には大分，1936年には佐世保，島原，1937年には鹿児島など，九州での個展を毎年のように開催した。後には示現会展にも参加。1968年1月17日死去。

(註)

石橋美三郎については，ご遺族の石橋正雄氏より多くのご教示をえた。福岡県立美術館に2006年，石橋正雄氏より石橋美三郎《子供(石橋雪雄像)》が，石橋家(福岡県みやま市瀬高町)より《静物(花)》が寄贈された。《子供(石橋雪雄像)》の寄贈に際し，作品修復について石井亨氏の尽力をえた。

(参考)

・『瀬高町誌』，瀬高町，1974年
・植野健造「第五章　近代の洋画」「『柳河新報』にみる柳川の近代美術年表」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成　第三集　柳川の美術1』，柳川市，2005年2月
・植野健造「第四章第二項　洋画と彫刻」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成　第三集－二　柳川の美術2』，柳川市，2007年3月

□溝江勘二(みぞえ かんじ　1909-2001)

1909年9月1日，福岡県三潴郡田口村大字三丸一七九四番地の二(現・大川市)に，父溝江萬吉，母トリの長男として生まれる。1928年3月福岡県立中学校伝習館を卒業。同年12月上京し本郷洋画研究所に入所，翌1929年橋本八百二の書生となる。1930年第17回光風会展に《静物》が初入選。1931年の第12回帝国美術院展覧会(帝展)において《鮭》が初入選する。《鮭》は1933年に柳川・立花家の買上げとなる。第二次大戦前は光風会展，帝展，新文部省美術展覧会(新文展)をおもな作品発表の舞台とし，その他にも第一美術協会展，主戦美術協会展などにも出品した。1933年には柳河京町の豊文堂において，1937年には柳河松屋デパートにおいて個展を開催している。戦後も東京に在住し，光風会会員として同展に作品を発表し続け，1958年に社団法人となった新日展にも出品を続けた。2001年1月1日死去。2002年と2005年に大川市立清力美術館において遺作展が開催された。

fig. 7　溝江勘二《鮭》
1931年，油彩・カンヴァス
72.4×90.8cm，柳川御花

(参考)

・『溝江勘二画集』(溝江勘二画集刊行会，二〇〇一年三月)
・『溝江勘二先生を偲ぶ展』(リーフレット，二〇〇二年七月)
・『溝江勘二遺作展目録』(リーフレット，二〇〇六年八月)
・植野健造「第五章　近代の洋画」「『柳河新報』にみる柳川の近代美術年表」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成　第三集　柳川の美術1』，柳川市，2005年2月
・植野健造「第四章第二項　洋画と彫刻」柳川市史編集委員会編『柳川文化資料集成　第三集－二　柳川の美術2』，柳川市，2007年3月

□松本英一郎

(まつもと えいいちろう　1932-2001)

福岡県久留米市に生まれた松本英一郎は，東京芸術大学油画科および専攻科の林武教室に学んだ。同大学在学中の1957年の第25回独立展で初入選，翌1958年から3年続けて独立賞を受賞。1960年に独立美術協会会員となり，以後は独立展を中心に，個展や「新表現展」「十果会展」などのグループ展，「日本国際美術展」「日本秀作美術展」などの企画展を発表の場として活躍した。一方，1968年に多摩美術大学の講師となり，1972年助教授，1983年からは教授として美術教育にも力を注いだが，在職中の2001年に惜しくも死去した。初期の1950年代後半にはフォーヴィスムあるいは抽象表現主義的な作風を試みた時期もあったが，1960年代中期に紅白の幔幕と人物を描く「平均的肥満体」のシリーズで注目を浴び，1970年代からは茶畑や山並みを描く「退屈な風景」，さらに闘病体験を経た1987年以後は「さくら・うし」，そして1997年以降の晩年は「花と雲と牛」「花あかり」のシリーズの連作を，それぞれ飽くことなく描き続けた。旅先や日常で見つめた風景の中に，自らの心象や文明批評，世界観や時代観をユーモアに

包んでおりこんだ風景を描き続けた画家であった。

1932年7月8日，福岡県久留米市小頭町4丁目110番地の1に，父・松本大藏，母ハルの七男三女の四男として生まれる。1945年4月，福岡県立明善中学校に入学。1948年4月，福岡県立明善高等学校に入学。明善高校時代には美術部に所属した。1951年卒業。1953年4月東京芸術大学油画科に入学。1957年3月同大学油画科林武教室を卒業。大橋賞を受賞した。同年4月東京芸術大学林武教室専攻科に入学。同年10月第25回独立美術展に初出品し初入選する。以降，独立美術展には亡くなる2001年の第69回展まで毎年出品した。1959年3月東京芸術大学林武教室専攻科を卒業。1960年1月第4回新表現展に参加出品，以降第8回展まで連続出品する。同年10月第28回独立展において3年連続で独立賞を受賞。独立美術協会会員に推挙される。1968年5月多摩美術大学講師，1972年12月多摩美術大学助教授となる。1978年，心臓発作で倒れる。慶応病院において療養，精密検査の結果，肥大性心筋症の診断を受ける。同年，小平市たかの台から東京都八王子市絹ヶ丘3丁目34番3号(当時の地名は八王子市中山)に転居する。1979年5月，(第1回)十果会展に出品。以後毎年出品。1983年4月多摩美術大学教授となる。1986年1月，『月刊へら』に絵と文の連載を始める。1990年6月，「松本英一郎展」，青梅市立美術館で開催。1992年この年，東京都八王子市絹ヶ丘3丁目34番3号の自宅を建て替え新築し，新しいアトリエも完成する。1993年9月，「松本英一郎の世界—退屈な風景・さくら・うし—」展，池田20世紀美術館で開催。1999年5月28日，心筋症で倒れる。左半身麻痺の後遺症がのこった。神奈川県湯河原町の病院で療養，リハビリにつとめ，12月より多摩美術大学の勤務に復帰した。2001年6月17日，多摩美術大学の学生とのゼミ合宿で滞在していた山梨県富士吉田市の多摩美術大学セミナーハウスにおいて倒れ，病院に搬送されたが死去する。2003年6月，「松本英一郎 Works　1968-2001」展，多摩美術大学美術館で開催。

(註)

石橋美術館では，2007年9月24日から11月25日まで「退屈な風景　松本英一郎展」を開催した。展覧会開催にあたってはご遺族の松本泰子氏より多大なご協力をいただいた。展覧会終了後の2007年，松本泰子氏より松本英一郎《退屈な風景茶畑》(1974年，油彩・カンヴァス)を購入し，《平均的肥満体 No.9-J》(1967年，油彩・カンヴァス)など11点の作品の寄贈を受けた。

(参考)

・多摩美術大学絵画学科油画研究室編『松本英一郎 Works 1968-2001』，多摩美術大学，2003年6月

・『退屈な風景　松本英一郎』展図録，石橋財団石橋美術館，2007年9月

・『ブリヂストン美術館　石橋美術館　館報』第56号(2007年度)(本号)